

認知意味論に基づく重複形容詞の分析

荒川 洋平

【キーワード】

重複形容詞 派生元 中心義 転義 動機付け

はじめに

本論文は、認知意味論、特に認識の三角形（メタファー・メトニミー・シネクドキ）による意義展開の理論を元に、現代日本語の重複形容詞を分析・考察する。

1 では、重複形容詞を定義し、このカテゴリー成員と派生元の語を挙げる。

2 では、先行研究を概観する。

3 では、上記カテゴリーから選択された重複形容詞を意味の観点から再分類し、特に単独形容詞（注 1）を派生元とする重複形容詞の多くは派生元である単語の中心義からの派生ではなく、転義からの派生であることを検証する。同時に、畳語の動機づけに「比喻性」を加えることを主張する。

4 は、まとめである。

なお本稿における「中心義」とは、瀬戸（2001）、小森（2002）らが提唱する共時的な意味ネットワークの中心であり、母語話者の頭の中で中心的であると見られる意義である。中心義は他の意義を理解する上での前提となり、具体性が高く、認知されやすい意義であり、古義とは異なる場合もある。

1 重複形容詞の定義と分類

日本語の形容詞には、たとえば「たどたどしい」のように、「しい」の前に同語の反復、いわゆる畳語を伴うものがあり、重複形容詞と呼称される。この形容詞のカテゴリーには、「寒々しい」のように反復時に連濁が生じるものも含み、かつ反復される当該の語が自立語として認識しうるかどうかは問わない。

上の定義に従うと、現代日本語における重複形容詞のカテゴリー成員は、表 1 に示す 45 語である。作成にあたっては、「日本国語大辞典」「広辞苑」「逆引き広辞苑」「大辞林」および奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科自然言語処理学講座が作成した日本語形態素解析ソフトウェア「茶筌」を利用した。（注 2）

成員の決定に際しては、上記の辞典において、文語である旨が記載されているものは、原則としてこれを省いた。また「ずうずうしい」に卑しめの意を示す接頭辞「いけ」が付いた「いけずうずうしい」は省き、「はかばかしい」に関しては大辞林にある「現代語ではふつう舌に打ち消しの言い方を伴う」を尊重して、これを成員に含めた（注 3）。

また重複形容詞は単語 A の反復から生じた派生型の形容詞であるから、すべての重複形容詞には派生元の語 A が存在する。これは表 1 の（ ）内に記載した。派生元の決定にあたっては上に挙げた国語辞典に加えて吉田（編）（2000）および飛田・浅田（1991）を援用した。なお、派生元の語は語根せず、単語とした。

表 1 派生元の品詞の別による現代日本語の重複形容詞

1 派生元が名詞あるいは形容動詞であるもの（27 語）

ういういしい（^{うぶ}初）

うやうやしい（^{うや}礼）

おおしい（^お雄）

かいがいしい (甲斐)	ぎょうぎょう (仰 ^{ぎやう})	けばけばしい (けはやに)
しらじらしい (白)	すがすがしい (清)	そうぞうしい (忽々) そうぞう
そらぞらしい (空)	どくどくしい (毒)	とげとげしい (刺)
なまなましい (生)	はかばかしい (量)	ばかばかしい (ばか)
はなばなしい (花)	ふくぶくしい (福)	ふてぶてしい (太 ^{ふと})
まがまがしい (禍 ^{まが})	まめまめしい (まめ)	みずみずしい (瑞 ^{みず})
めめしい (女 ^め)	ものものしい (物)	よそよそしい (よそ)
ゆゆしい (斎 ^ゆ)	りりしい (凜凜 ^{りんりん})	れいれいしい (麗麗 ^{れいれい})

2 派生元が動詞であるもの (4 語)

いまいましい (忌む)	おどろおどろしい (おどろく)	なれなれしい (馴れる)
にぎにぎしい (賑わう)		

3 派生元が形容詞であるもの (14 語)

あらあらしい (荒し)	いたいたいしい (痛し)	おもおもしい (重し)
かるがるしい (軽し)	こうごうしい (神神 ^{かみ} し)	さむざむしい (寒し)
ずうずうしい (凶太 ^ず し)	たけだけしい (猛し)	たどたどしい (たづたづし)
ながながしい (長し)	にがにがしい (苦し)	よわよわしい (弱し)
わかわかしい (若し)	にくにくしい (憎し)	

2 先行研究

重複形容詞の意味を扱った研究は、筆者が渉猟した限り、国立国語研究所 (1972) のみである。国立国語研究所 (*ibid.*) では、「ながながしい」と「ながい」の対立などを例示して、重複形容詞が単独形容詞と比して「主観的な実感性」によって区別される、としている。(注 4)

また重複形容詞の音韻上の研究としては、古語におけるシク活用について例証したものとして蜂矢 (1981) および豊語における連濁についての原口 (2000) の論考がある。

一方、認知言語学のカテゴリー研究を踏まえて形容詞の考察を行ったものに上原 (2002) があり、カテゴリーがその構造を有するには何らかの理由・動機が存在するという、「カテゴリーの有契性」を前提とする点で、本稿と共通性を持つ。

3 重複形容詞の意味分析

3.2 意味分析の前提

日本語の形容詞は、歴史的に連用形が「〜く」となるク活用 (第一種活用) と、「〜しく」あるいは「〜じく」となるシク活用 (第二種活用) に分類されてきた。(注 5)

重複形容詞はすべてシク活用の形式であり、山本 (1955) などの考察にある通り、シク活用の形容詞には心の動きを表すもの、つまり感情形容詞が多く、「大辞林」では接尾語「しい」を定義して『そういうさまである、そう感

じられる、という意を表す』としている。(注6)

上記の説明に従う限り、重複形容詞の意味は、たとえば「凛々しい」が「凛とした様子が感じられる、きりりとひきしまっていて勇ましい感じである」であるように、「反復される語 A の中心義である様子が話者に感じられる意味になる」という推論が成立する。しかし実際は、その例は上記「りりしい」を含めて12語で、全体の約26%に過ぎない。特に派生元の語が単独形容詞である場合、上記の説明に合致する例はない。本稿では上記の意味のみを有する重複形容詞を、意味分類上、カテゴリー A の重複形容詞と呼称する。

残りの重複形容詞は、以下のカテゴリーに分類可能である。

一つは上記の意も有するが、「語 A の転義の意がそのように感じられる」意も有するものである。たとえば「重々しい」は「何かが物理的に重い様子を感じさせる」意と共に「落ち着いた態度を感じさせる」「重苦しい様子だ」の意も併せ持つ。これに合致する重複形容詞は11語であり、全体の約24%に当たる。本稿では、このように「派生元の語の中心義と転義の双方の意味を話者に感じさせる」意である重複形容詞を、意味分類上、カテゴリー B の重複形容詞と呼称する。

もう一つは上記の意は有さず、「語 A の転義の意がそのように感じられる」意のみを有するものである。たとえば「軽々しい」は「何かが物理的に軽い様子を感じさせる」意はなく、「考えが浅い様子を感じさせる」「軽はずみな様子だ」の意しか持たない。これに合致する重複形容詞は23語であり、全体の約半数に当たる。(注7) 本稿では、このように「転義の意味のみを話者に感じさせる」意である重複形容詞を、意味分類上、カテゴリー C の重複形容詞と呼称する。

以上の観点から、表1で示した現代日本語の重複形容詞を再分類すると、表2の通りになる。

表2 意味分析から分類した現代日本語の重複形容詞

カテゴリー A 派生元の語の中心義のみが感情形容詞の意味になっているもの (12語)				
恭しい	清々しい	凜々しい	騒々しい	賑々しい
憎々しい	はかばかしい	馬鹿馬鹿しい	禍々しい	まめまめしい
凛々しい	麗々しい			
カテゴリー B 派生元の語の中心義・転義の双方が感情形容詞の意味になっているもの (11語)				
痛々しい	重々しい	寒々しい	猛々しい	たどたどしい
毒々しい	刺々しい	長々しい	由々しい	弱々しい
若々しい				
カテゴリー C 派生元の語の転義のみが感情形容詞の意味になっているもの (22語)				
荒々しい	忌々しい	初々しい	雄々しい	おどろおどろしい
甲斐甲斐しい	軽々しい	仰々しい	けばけばしい	神々しい
白々しい	空々しい	生々しい	馴れ馴れしい	苦々しい
華々しい	福々しい	ふてぶてしい	瑞々しい	女々しい
物々しい	よそよそしい			

次節では、各カテゴリーの重複形容詞が派生元の中心義・転義といかなる関係を有するかについて詳述する。転

義については、メタファー（類似性にもとづく転義）、メトニミー（時間や空間などの近接性にもとづく転義、いわば現実世界における意味の横滑り）、シネクドキ（カテゴリーの類と種の入替りにもとづく転義）の3分類から分析する。

3.3 カテゴリー A の意味分析

カテゴリー A の重複形容詞は派生元の中心義をそのまま踏襲して、「いかにもそのように感じられる」意を示す。これは国立国語研究所 (*ibid.*) にある通り、その感じられ方が実感性を帯びていることを示すが、筆者は語の反復が意味の強調によって動機づけられている点を指摘したい。

いわゆる畳語の意味の一つに強調があることは「日本国語大辞典」に示されているが、さらにこれを示す論拠として、カテゴリー A の重複形容詞が、新たに強調を示す副詞とは共起しにくいことが挙げられる。たとえば google の検索では「憎々しい」が用いられているサイトは約 37,600 件に上るが、「とても憎々しい」はそのうちわずか 10 例に過ぎない。これはすべてに合致する例ではないが「はかばかしい」「禍々しい」などに顕著である。

3.4 カテゴリー B の意味分析

カテゴリー B の重複形容詞は「派生元の語の中心義、転義の双方の意が話者に感じられる」という意味を有する。分析に当たって参照した資料は 3.1 の通りである。

たとえば「寒々しい」は、形容詞「寒い」を派生元とし、これを重ねて重複形容詞にしたものである。「寒い」は「気温が低いために皮膚に不快な刺激を感じる」意であり、寒々しいは「いかにも寒そうな感じである」の意で用いられるが、同時に「取り立てて評価すべきものが見られない」意にも用いられる。これは季節が冬に向かうと、木の葉や草が枯れ果て、視界に入る目立つものが少なくなることを身体経験とする転義である（原因で結果を示すメトニミー）。（注 8）

以下は上記を図示したものである。なお例文は主に「大辞林」から検索した（一部改）。

寒々しい	寒い：気温が低いために皮膚に不快な刺激を感じる（例）寒々しい冬の夕方
メトニミー（原因で結果）	見るべきものがない（例）ひとり者の寒々しい部屋

3.5 カテゴリー C の意味分析

カテゴリー C の重複形容詞は、派生元の語の転義の意のみが話者に感じられる、という意味を有する。分析に当たって参照した資料は 3.1 の通りである。

たとえば「初々しい」は、名詞「うひ」を派生元とし、これを重ねて重複形容詞にしたものである。「うひ」は生まれたての意であるが、「初々しい」は「いかにも生まれたてのように感じられる」の意ではなく、「世慣れ、世間ずれしておらず。気恥ずかしそうにしているように感じられる」意である。これはコトを時間軸の上で表した場合、生命の始まりとコトの始まりが特性的な類似を持つこと（メタファー）が転義の動機付けであり、さらに物事が初めての場合、それに慣れないうちは気恥ずかしさを感じる（原因で結果を示すメトニミー）が転義の動機付けとなる。以下は上記を図示したものである。なお例文は google から検索した（一部改）。

初々しい	初（うひ）：生まれたての
メタファー（特性類似）	初めての（例）新入生の初々しいランドセル姿が目には浮かびます。

メトニミー（原因で結果）	世慣れない （例）彼女たちの初々しい態度が、私達を刺激してくれました。
--------------	-------------------------------------

以下、カテゴリー C に属する重複形容詞の意味分析を図示する。

雄々しい	雄（を）：男
メトニミー（もので特性）	勇ましい （例）その雄々しい戦いぶりは人々を感服させた。

甲斐甲斐しい	甲斐（かひ）：努力の結果としての効果
メトニミー（結果で原因）	てきばきと勢いがある（例）その雄々しい戦いぶりは人々を感服させた。

仰々しい	仰（ぎやう）：上を向くこと
メトニミー（結果で原因）	おおげさな （例）その雄々しい戦いぶりは人々を感服させた。

3.6 反復の有契性

上記のような分析結果からは、重複形容詞において、なぜカテゴリー B、C が優勢であるか、という疑問が生じる。以下の推論から、そのうちのいくつかは説明可能である。

まず、派生元の中心義が 5 感で即座に認知できる場合は、「いかにも～のようだ」と推論する必要はない。たとえば「白々しい」の派生元「白」は視覚で認知可能であるから、「いかにも白く感じられる」は意味をなさない。（注 9）

また派遣元の語の通事的な意味変化から、説明可能な例もある。たとえば「忌々しい」は、古義では派生元の「忌む」をそのままタイプ A のように踏襲した「はばかり、遠慮すべきである（大辞林）」の意味であったが、現代語ではこの意味はもう持たず、タイプ C のカテゴリーに入る。

しかしながら、上記 2 点の説明でも、説明不可能な重複形容詞は残る。たとえば「重々しい（カテゴリー B）扉」はありえるが「*軽々しい扉」はなぜ言えないのか、説明不可能である。

筆者はこの解答として、反復の動機付けに、比喩性が存在するという仮説を提示する。同語の反復による畳語がその構造を持つには、意味機能の上で存在する理由や動機があり、これは認知言語学では言語形式一般の「有契性」を示す。（注 10）「日本国語大辞典」では、畳語は「語の意味を強めたり、事物の複数、動作・状態の反復・継続などを示したりする」と挙げられている。以下は google から採択したそれぞれの例文である。

- (ア) 山田さん、待って待って！（強調）
- (イ) インドネシアは大小約 13,700 の島々からなる。（複数）
- (ウ) 彼らはたびたびその店に立ち寄る。（反復）
- (エ) それを食べ食べ、ブログを書く幸せ。（継続）

上記の動機だけでは説明が困難な反復のグループは、いわゆるオノマトペ（擬音語・擬態語）である。重複形容詞にも古語の「つやつやしい」「くどくどしい」などオノマトペを派生元とするものが見られる。芋坂（編）（1999）にあるとおり、オノマトペは言語音が感性フィルターを通して音や様態を示したものであり、広義の比喩である。田守・スコウラップ（1999）は、オノマトペにおける反復は用いられる音が現実の自然界に間接的、比喩的に近づこうとした結果であることを述べているが、筆者はこれを含め、反復そのものが「まるで～であるかのようだ」と比喩をしめす意図に動機づけられていると考える。これは本来、限定された言語音という記号体系で、あらゆる事

物とその関係を描写しなければならない人間の必然的な工夫であろう。いわゆるトートロジーが意味の再確認を目して用いられるように、反復は冗長さをつきまとわせながらも、敢えてひとつの語を繰り返すことによって説得力を増し「まるで〜であるかのようだ」という比喩的な実感を話し手。聞き手に付与するものだと言える。現代日本語でも、反復が比喩・強調のいずれにも取れる例として、「あの人は若いくせにおばさんおばさんしている」などの例が観察できる。この仮説に関しては派生先の意味変化や変遷と共に、通事的により深く考察すべきであろう。

4 まとめ

本稿ではあまり省みられなかった重複形容詞の意味機能を派生元の語から再分類し、それらがメタファー、メトニミー、シネクドキのいわゆる「認識の三角形」によって転義した例と重複形容詞の関連を考察した。合わせてタイプ B、C の重複形容詞群がなぜ派生元の中心義からの派生を行わないかについて、反復の比喩性という試問を提示して説明を試みた。

今後は上記の試問をより詳細に検証しつつ、反復 (reduplication) の動機付けをオノマトペとの関連および他言語との比較・対照から探りたい。

注

(1) 「単独形容詞」を、蜂谷 (1981) は重複形容詞との対照における仮称としているが、吉田 (1999) もこれを採用している。

(2) 「茶筌」の概要については <http://chasen.naist.jp/hiki/ChaSen/> を参照のこと。

(3) 現代語に含めなかった重複形容詞は以下の 20 語である。うだうだしい、うとうとしい、かどかどしい、くだくだしい、くどくどしい、けいげいしい、ことごとしい、こまごましい、さえざえしい、すきずきしい、すねすねしい、ちょうじょうしい、つやつやしい、はればれしい、びびしい、ふさふさしい、ほねぼねしい、まざまざしい、まましい、やつやつしい。

(4) ただし国立国語研究所 (*ibid.*) は重複形容詞・単独形容詞という用語は採用していない。

(5) 現代語では「楽しい」「悲しい」など形容詞「〜シイ」の語尾「シ」は語幹の一部とし、形容詞の活用は 1 種類としている。

(6) 山口 (1971)、慶野 (1976) は個々の観点からこれに異を唱えている。また吉田 (編) (2000) は「甲斐甲斐しい」をク活用語としており、山崎 (1984) が述べる名詞性形容詞の分類を参照したとも考えられるが、筆者は誤記の可能性を採る。

(7) 「生々しい」「馴れ馴れしい」「忌々しい」「白々しい」に関しては派生元の語の中心義を感じさせる意もあるが、現代日本語ではすでに使われていないことを考慮し、このカテゴリーに含めた。

(8) 気温の低さが景色の際だちと反比例する言語的例証には「荒涼」「寒村」などがある。また「寒い」には視界の際だちと物事の際だちの間にある類似性により (特性類似のメタファー) 「お寒い陣容」といった用法も見られる。

(9) 類例として、形容動詞「きれい」は、伝聞以外では「きれいそうだ」が成立しないことが挙げられる。

(10) これと対立する言語理論は言語形式の「絶対予測性 (absolute predictability)」や「自立性 (autonomy)」である。詳細は Langacker (1991)、Taylor (1989) を参照のこと。

分析および分類に使用した国語辞典

- 『広辞苑 第五版』(1998) 岩波書店
『逆引き広辞苑』(1992) 岩波書店
『大辞林 第二版』(1999) 三省堂
『日本国語大辞典 第二版』(2001) 小学館

参考文献

- 蜂谷真郷 (1981) 「重複形容詞の構成」『同志社国文学』55-67
原口庄輔 (2000) 「新・連濁論の試み」『先端的言語理論の構築とその多角的実証』明海大学・平成11年度COE形成基礎研究費研究成果報告.715-732
飛田良文・浅田秀子 (1991) 『現代形容詞用法辞典』東京堂出版
慶野正次 (1976) 「形容詞ク活用・シク活用の遅速について」『形容詞の研究』笠間書院.3-X
国立国語研究所 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版.
小森道彦 (2002) 「多義語の記述とコロケーション」『英語青年』研究社.44-45.
Langacker, R. W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 2, Descriptive Application*, Stanford University Press.
芋坂直行 (編) (1999) 『感性のことばを研究する』新曜社.
瀬戸賢一 (2001) 「意義関係を記述する」『英語青年』研究社.9-11.
田守育啓・スコウラップ、ローレンス (1999) 『オノマトペ —形態と意味—』くろしお出版.
山口佳紀 (1971) 「シク活用」松村明 (編) 『日本文法大辞典』明治書院.286-287
山崎馨 (1984) 「形容詞とは何か」『研究資料日本文法3』明治書院 ●
山本俊英 (1955) 「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について」『国語学 第23巻』明治書院. ●
吉田金彦 (編) (2000) 『語源辞典 形容詞編』東京堂出版.
上原聡 (2002) 「日本語における語彙のカテゴリー化」大堀壽夫 (編) 『認知言語学II: カテゴリー化』東京大学出版会.81-103